

# 注意の語

文學博士 元良勇次郎

左の講話は本月十五日第十四回心理學通俗講話會に於ける元良博士の講演の極く大要を筆記したるものであります。博士及同會の承諾を得て茲に掲載致しますが、梗概の筆記の爲に其意味の徹底を缺く處あるは博士及讀者諸君に對して深謝せねばなりません。(編者)

## (一) 注意とは何ぞや

### (イ) 注意

### (ロ) 非注意

注意とは精神作用が何等かの事物に傾注した時、其の事物に對する觀念の活動状態を名づくるのであります。これに反して更に精神上何等の觀念の活動の起つて居らない状態をば、名づけて非注意と云ふのであります。されば人が覺醒せるときの精神状態を考へて見れば、精神作用として大概何等かの事物に就いて働いて居るものと見なければならぬから、隨つて幾分の注意作用は働いて居

るものと云はなければならぬ。たゞ睡眠中の如きは、單に生理的に呼吸はして生きては居るけれど精神的働きは先づないものと見なければならぬ。此れに依つて見るに覺醒時には何等かの注意作用は行はれて居るけれど、睡眠中には更に働いて居らぬ。即ち非注意の状態にあるものと云ふべきであります。

## (二) 注意の性質上の分類

### (イ) 無意注意

### (ロ) 自働注意

### (ハ) 有意注意

精神的活動は凡て注意作用として働くものではあるけれど、其の性質上より分類して見ると、諸種の階段に分るのであります。私は之を三ツに分けて説明するのが一番解りやすいとおもふ。第一の無意注意とは、殊更に或る一定の事物に對して意思を働かするといふではなく、何等か外界の刺激によりて精神が其方に傾くことがある。此の時

の精神作用が即ち無意注意であります。此の働きは後日に至りて記憶に残ることもあるが、皆が皆まで記憶として残ることはない。寧ろ其の儘になつて忘れて仕舞ふことが多いのであります。例へば、後日に至り、彼の時は左程氣を附けて居なかつたけれど、そんな事もあつた様ななと思ひ出すことがある。之れ即ち無意注意の記憶に残留したものであります。第三の有意注意とは精神的にも肉體的にも自己の自發的慾望が種々雑多に起る來る中で、其の中の一つを定めて、或事物に精神全體を傾け集めて働かすのを云ふのであります。又外界の事物は吾々に種々の刺激を與へるのであるけれど、それ等の一切に敢て耳を傾けない、即ち心を奪はれないで、自己の一定したる或る一事に精神全體を傾ける、此の専心專意の働きのいふのであります。注意の三種のうちでも是れが最も必要なものであつて、人の精神修養上に於ても極く大切であります。隨つて教育などは専ら此の作

用を働かせねばなりません。即ち、つまり諸種の抵抗に押勝つ力即ち諸種の抵抗を打破りて一定の仕事をするのであります。それから、此の二者の中間に、自動注意と名づくべきものがもう一つあります。即ち、それは、殊更に有意的に働かざらぬでもないが、然かし頓と無頓着の間に起る作用でもない。注意するとはなく或る事物に心を奪はれよく後日まで記憶に残る作用である。之れを名づけて自動注意といふのであります。

(二)有意注意の働きの上の分類

(イ)集中作用

(ロ)分配作用

(ハ)期待作用

昔から或る一派の學者は、注意とは必ず一點に集まるべきものとして解釋して居たけれど、今日では絶對に一點に集まるべきものとは考へられないといふことになつて居る。即ち有意の注意にも其

の意思傾注の度合といふものがあつて、多くの場合、朦やりした注意から次第に明らかになつて來るのであるが、其の度合の強弱によりて範圍が廣狹するのである。即ち注意の度合と範圍とは反比例する譯で、強く集中するに従つて明らかにはなるけれど其の廣さは狭くなる。それと反對に、弱くなれば朦やりはして來るが、其の廣さは擴大するのである。斯様に注意作用と云つても其の働きの度合が強くなり、弱くなり、明らかとなり、朦やりとなり、廣くなり、狭くなるのは即ち注意の運動である。處で、此五運動性があるから第二の分配作用が生ずるのである。分配作用とは俗に云ふ氣を配る事であつて、一寸聞くと注意作用とは正反對のこの様に考へらるけれど、決して反對のものではない。蓋し、分配と散亂とは大に異なるもので、散亂といへば至々注意作用と反對のことになる。然らば分配とは如何なることかといふと、一事物に心を集めて居る上に、其の事物に

關する諸方面に向つて心を運動せしむることである。即ち一事物を判然たらしめんが爲めに表面に或は裏面に或は側面に精神を分配して動かすのである。處が斯ういふ場合には生理的體の變化から影響を蒙りて精神作用にも變化を生ずるものである。これ等が即ち後に述べんとする注意の背景になるので、一事物の認識には必ず添ふべきものである。次に第三に期待作用といふがある。これは物を探がす時に起る所の作用で、例へば古本屋に立ち寄つた場合即ち何か目的があつて何程の本は見たいと思つて立ち寄れば直ぐ並べてある本をあさり回はして見もし又開いても見るけれど、豫め目的がなければ本を手にとつて見ることもなく沈んや聞いて見るなどいふことは更でない。即ち心に何等か期待して居る事に合はして探がして見るので之は單に集中でも分配でもなく集中、分配以外の作用といふべきである。詰まり集中作用は注意の初期であつて、分配作用と期待作用と

は稍込み入つて居る働きである。

(四) 注意の範圍

(イ) 最少限

(ロ) 擴大と不明暈

(ハ) 主眼と邊暈

前に言つた如く或人は注意は絶対に一點にのみ集るべきものだといふたが、それは今日では證明が出来ぬ。寧ろ前にも話した様に廣狹があるので、其の極めて強く明らかなる而して狭少なる場合はどの位かと實驗して見ると畧六箇位(勿論餘りに遠く距るものは論外なり)であるといふことに今日一般實驗學者の説は一定して居る。例へば或る近距離の場合に多くの點を印したるものを注視するに、其の中六箇迄には狭く注意を統一することが出来るといふことになつて居る。電燈を見ても六箇位迄に注意を集むることは出来るけれど、夫れ以内單一といふにまで狭く集ることは出来ない。尤も其の六箇を中心として集まつては居るもの、

單にそのみに限らるゝものではない。其の外部にも多少は注意を引いて居る。即ち朦やりながら弱いけれど認めては居るのである。されば注意は一所に集まると同時に其の點の周邊の物迄も暈視することが出来る。又これが最も必要なのである。

(五) 注意と生理的變化

(イ) 機關の調節

(ロ) 注意の律動

(ハ) 一晝夜中何時が最も注意作用に適するか

(ニ) 飲食物の關係

(ホ) 午前、午後、夜

(ヘ) 個人の特質及習慣

注意の生理的變化の次第を述べんに、第一機關の調節作用といふことがある。例へば眼か或る一物を認めんとして眼球のレンズが其の物に應じて調節すると同時に精神的即内部の作用にも調節が起るのである。凡て五感の作用と同時に精神も調節せらるゝのである。第二に注意には律動がある。

それは注意にも上り下りがあること、即ち律動的に働くといふことである。機關の調節にも上り下りがある故にそが内部にも影響して精神の働きにも上り下りを生ずるのである。呼吸に緩急あるが如く、脈膊に高底あるが如く、生理的變化によりて其の影響を蒙りて注意作用にも上り下りが生ずるのである。次に一晝夜中何時が最も注意作用に適して居るかといふことを研究して見ると、午前午後、夜と次第に變化がある。即ち三度の食事をする毎に高低があるのである。オックスフォードのマクデウガル教授の研究に依るに、午前八時より十五分間毎に試験して見ると、次第に認識の誤謬を増す。茶を飲めば元氣は多少恢復するけれど、午後は午前よりも一層誤りを増し、夜分は割合に正確であるといふことである。而して其の試験の間に茶に換ふるに酒を以てするときは、誤謬の度合は著しく増すものであるといふて居る。其の他學者の實驗を總合して見るに一日中午前は九時よ

り十時の間、午後は三時より四時の間が最も活力旺盛であるといふことに一致して居るやうだ。然かし一概に断定は出来ぬのである。それは、第一個人の食物の如何にも由るべく、亦其の特別的體質にも依るべく、亦其の習慣（寢起の時刻、職業、活動の差異等）に由つても異なる所のあるのは至當のことである。（次號完結）

○おさな子（一茶）

こぞの夏、竹植る日の頃、うき節しげき浮世に生れたる娘、愚にして、物に敏かれとて、名をさとと呼ぶ。今年、誕生日祝ふ頃ほひより、てうち／＼あわい、天窓てん／＼頭振りながら、同じき子ども風車と云ふものを持つてゐるを、葎りに欲しがりてむつがれば、とみに取らせける。やがて、むしや／＼しやぶつて捨て、露程の執念なく、直に外の物に心移りて、そこらにある茶破を打破りつゝ、それも直に捲みて、障子の薄紙をめり／＼むしるに、能く爲た／＼と響むれば、誠と思ひ、きや／＼と笑ひて只捲りに捲りぬ、心の内一點の塵も無く、名月の皎々しく、清く見ゆれば跡無き俳優見るやうにて、なか／＼に心の皺を伸ばしぬ。（一節）